

読み聞かせのすごい力—愛着形成

愛着形成のためには、お母さんは子供にたくさん話しかけるのがいいといわれています。でも、お母さんは忙しいので、いちいち話しかけている暇がありません。それに、日常生活でかける言葉はたかが知れています。「早く食べなさい」とか「早くお風呂入ろう」とか、時には「急ぎなさい、「何してるのとふと怒ったりもしますが、そういう言葉をかけても親子の間には何も生まれないのです。

でも、絵本があれば、絵本の言葉と絵の力を借りて忙しい日々の子育て中でも、親子同士心の交流ができるのです。

わが家の場合、下の子が小さいときに読み聞かせをしていたら、上の子も「それ、知っている」と言って一緒に聞いていました。きょうだいで同じ本を何度も読むと、それが共通体験になります。子どもたちは今でも絵本の話が出ると、「あの絵本はこうだったよね」「ああ、読んだ、読んだ」みたいにノツてきます。そういう共通の体験を持っていることは子どもたちの様子を見てみると本当に大事だと思います。きょうだいのいない一人っ子でも、お母さんが読んであげると、お母さんと子どもの共通体験ができます。

子どもが二十歳、三十歳となったときに、「あの絵本は面白かったね」という共通の思い出があるのはいいことなのです。遊びに行った思い出も楽しいのですが、絵本は日々の生活に入り込んでくるものなので、細かな思い出がたくさんできます。「あの絵本を読んだとき、ママ、泣いてたよね」「あの絵本の豚の色はこんなだった」というように親子の小さな思い出が沢山つくれます。しかも、そんな思い出が家にいながらにしてつくれるのです。大きな思い出も大切ですが、人生は小さな小さな思い出がたくさん詰まっていることも大切なのです。親としては、ディズニーランドに行ったり、海外旅行に行ったりした大きな幸せのほうを優先しがちですが、そこまで頻繁に行くこともできないわけですから。そういう大きな幸せも確かに楽しいのですが、豊かな人生を築いていくためには泡のように小さな幸せがいっぱい必要なのだと私は子育てをしながら感じました。ママが読んで、子どもが聞いて、二人で楽しかったね、という小さな幸せをたくさんつくるために、絵本や童謡が大きな力を発揮してくれると思うのです。

ディズニーランドと比べたら、本一冊の楽しみは小さなものかもしれませんが、絵本はいくらでも読めます。しかも、子どもの心に染みわたって長く残ります。絵本が創る思い出は、「一生涯、心を支えてくれる」ものだと私は思っています。

—「読み聞かせのすごい力」P224より